

聖書：創世記 45：1～28

説教題：私をここに遣わしたのは

日時：2024年6月30日（朝拝）

37章から見て来たいわゆる「ヨセフ物語」の一つのクライマックスが今日の章にあります。ヨセフは兄たちによって奴隷として売り飛ばされ、大変な中を通らせられました。今やエジプトの王ファラオの右腕として仕える宰相の立場へ引き上げられました。その彼のもとにヨセフの兄弟たちが食糧を求めてやって来ますが、彼らはまさか目の前の大臣がヨセフだとは分かりません。そしてしばらくのやり取りが続いた後、ついに今日の章でヨセフは自分の身を明かします。彼がそうしたのは前の章のユダの執り成しの言葉を聞いたからですね。ヨセフはこれまで兄たちが20年以上前に自分を売り飛ばしたことをどう思っているのか、知ろうとして来ました。兄たちは変わっていないのか、相変わらず利己的なのか。それとも以前のことを悔い改めて、今は変わった人になっているのか。前の章のユダの言葉には兄たちが以前の罪を悔いていること、そして兄弟を代表するユダが父を愛して父を深く心にかけていること、そのために自らがエジプトで奴隷になっても良いと考えていることが示されました。ヨセフはユダの言葉を聞いて自分を制することができなくなります。「皆を私のところから出なさい」と命じて、兄弟たちだけが同じ部屋にいるようにした後、声をあげて泣きました。そしてついに「私はヨセフです」と自分の身を明かしたのです。ヨセフがいかにこれまで忍耐して来たか、いかにこの日を待ち望んで来たか、そしていかにこの時を大きな喜びとしたかが伺えます。これまで溜まっていた思いが一気にあふれ出るように彼は声を上げて泣きました。それは部屋の外にいたエジプト人にも聞こえるほどのものでした。

ヨセフは兄弟たちに言います。「私はヨセフです。父上はお元気ですか。」兄弟たちはヨセフを前にして、驚きのあまり、答えることができませんでした。それはそうでしょう。目の前の大臣が弟ヨセフであるとは到底信じられないことです。彼らは20数年前にヨセフを奴隷として売り飛ばしました。今はどこでどう生活しているのか、あるいは厳しい状況下で死んでしまったのか、分かりません。ところが今、自分たちの目の前にいるこの立派な衣装に身を包み、とてつもない権威を持つ人が弟ヨセフだということです。3節に「驚きのあまり」とありますが、これは恐怖を感じるような驚きであったと思われます。自分たちはヨセフにとんでもないことをした。そのヨセフ

が今は圧倒的な権力を持つ者として自分たちの前にいる。次の瞬間、自分たちはどのように扱われるかを思い、兄たちは体が硬直し、麻痺するような状態になったことでしょう。

しかしそんな彼らに対するヨセフの言葉は非常に優しいものでした。彼は4節で「どうか私に近寄ってください」と言い、「私は、あなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです」と言います。そして5節で「今、心を痛めたり自分を責めたりしないでください」と言います。その理由が次に述べられます。「神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださったからです」と。ここにヨセフが物事全体をどういう目で見えていたかが明らかにされています。すなわち神の主権という真理のもとですべてを見るということです。これは人間のしたことを見ないとか、人間の責任を軽んじるということではありません。ヨセフは4節で「私はあなたがたがエジプトに売ったヨセフです」と彼らがしたことを確認しています。5節最初でも「私をここに売ったことで、云々」と彼らのしたことに触れています。その彼らの悪に注目して、延々と彼らを責め続けることも、しようと思えばできました。しかしヨセフはむしろ神の主権を指し示して彼らを慰めようとしています。なぜそうするのでしょう。それは彼ら兄たちがすでに悔い改めているからです。彼らは自分たちがかつてヨセフにしたことを思い、苦しんでいます。その心が責められています。そういう兄たちの悪を責め続け、いつまでもその傷口に塩を摺り込み続けるようなことをヨセフはしなかったのです。

ヨセフはこの2年間、国中に飢饉が起きていますが、まだあと5年は続くと言います。そんな中、神はあなたがたのために残りの者たちをこの地に残し、大いなる救いによってあなたがたを生き延びさせるために私を先にお遣わしになったのだと言います。8節では「ですから、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです」と言います。確かにヨセフをエジプトへと売ったのは彼の兄たちでしたが、一番上にあって主権的に事を導いておられたのは神なのだ！と彼は言います。もちろん兄たちはこれによって「我々は結局神に用いられる良い働きをしたのだ。御心にかなうことを行ったのだ」などとふんぞり返るべきではありません。彼らは神の御心を知り、それを行おうとしてヨセフをエジプトへ売ったわけではありません。彼らは自己中心的な妬みと憎しみの心でヨセフに暴力を振るい、ちょうどそこを通りかかった商人にヨセフを無慈悲にも奴隷として売っただけです。本来このことゆえに彼らは厳し

く神に罰されるべきです。しかしヨセフはそんな彼らよりももっと高いところであって、神がご自身の良い御心を行われたのだと述べています。自分たちは取り返しのつかない悪を行ってしまったと自らを断罪している者たちに、でも神はそこから良い結果を取り出してくださいましたよ！と示してあげるなら、それは悔い改めている者たちに大きな慰めをもたらすでしょう。もちろんそれで彼らの罪が軽くなるわけではないのですが、その心の重荷はずっと軽くされます。ここにヨセフがいかに兄たちを慰めようとする心で彼らに接していたかが示されています。コリント人への手紙第一 13 章の愛の賛歌に、愛は「人がした悪を心に留めず」とありますが、それはまさにこのヨセフの姿に見られるものでしょう。

と同時に私たちが思うべきは、これは単に兄たちを慰めるための取って付けたような言葉ではなく、これまでの試練を振り返ったヨセフの深い述懐の言葉でもあっただろうということです。彼がこのような慰めの言葉を語ることができたのは、彼自身が神の主権の教理、神の摂理の真理に深く慰められ、生かされて来たからです。彼はこれまで散々な目に遭って来ました。人が自分にしたことだけを見ていたら心がかきむしられるだけです。自分を傷つけた人々への怒りや恨み、復讐心で一杯にさせられるところです。しかしヨセフは人間がしたことばかりを見つめることをやめ、その上にある神の主権に思いを向けて来ました。主が主権者なら、その方が良しとされたことしかこの世界には起こらないはずです。自分に起こった様々な出来事も、真の主権者が良しとされて初めて自分に生じた。ですからそこには何らかの主の優れて良いお考え、ご計画、目的があるはずです。ヨセフはすぐに全体の絵が見えたわけではありません。しかし彼はともにいてくださる主に信頼し、より頼み続けました。その中でついに、これまで考えてみたこともないような神の御心があったことを知る者とされました。彼は奴隷として働いた後、濡れ衣を着せられて監獄へぶち込まれ、人生が最悪の谷に落ち込んだように思われました。しかし、その監獄でエジプト王に仕える献酌官長に出会いました。その彼にその後、忘れられて、すべては空しく終わったかと思われた時、ちょうど良いタイミングでエジプトの王ファラオのもとに呼び出されました。そして王の夢を解き明かして、まさかのエジプト第二の地位に上げられ、国全体を導く者となりました。そして今、世界の人々をも助け、また家族とも再会し、彼らを助けることができるようにされました。ですから「ここに私を遣わしたのは神なのです」という言葉は、彼自身が深く味わい、感謝し、また慰められて来た真理でした。そのように彼自身が神によって慰められて来たので、他の人をも同じように慰めるこ

とができたのです。神が自分にあわれみ深く関わってくださったように、その神を反映する仕方でも他の人を慰めることができたのです。

9 節以降でヨセフは、急いで父上のところに上って行き、エジプトに下って来てくださいと告げるようにと言います。飢饉はあと 5 年続きますから、父上も家族も、また父上に属するすべてのものも、困ることのないように私が養いましょうと言います。そしてヨセフは弟ベニヤミンの首を抱いて泣きました。また他の兄弟みなにも口づけし、彼らを抱いて泣き、互いに語り合いました。

このことがファラオの家に伝えられると、ファラオもその家臣たちも喜んだと 16 節にあります。ファラオは、すぐカナンの地へ行き、ヨセフの父と家族を連れて来るように！そして私はエジプトの地の最良のものを与えると言います。いかにヨセフがファラオに愛されていたかが分かります。ヨセフはこれまでもいつもそうでした。ポティファルの家で奴隷として働いた時も、また監獄の中で働いた時も、そうでした。もし彼が人ばかりを見て、自分に害を与えた人への怒りや苦々しさでその心が一杯だったら、そしてその心を映し出す言動が彼から出ていたら、決してヨセフは人々に愛されることはなかったでしょう。しかし難しい状況でも神を見上げてまっすぐ生きる彼の姿は周りの人々を魅了せずにはいなかったのです。それはファラオとその家でも同じだったのです。

そこでイスラエルの息子たちは出発します。彼らは車を与えられ、道中の食料も与えられ、さらに一人一人に晴れ着も与えられました。ベニヤミンには銀 300 枚と晴れ着 5 着が与えられました。また父に対する最良の多くの贈り物も積まれました。ヨセフは送り出す際、兄弟たちに「道中、言い争いをしないでください」と言います。もう互いに過去のことで責め合ったりしないように、神が導いてくださったこの祝福の中を喜んで生きるようにと勧めます。

彼らがカナンの地に到着し、ヤコブに「ヨセフは生きています」と告げると、父は茫然としていたとあります。確かにそれはそう簡単に信じられる話ではなかったでしょう。ヤコブはヨセフが話した内容を残らず聞き、またヨセフが送ってくれた車を見て元気づいたとあります。そして言いました。「十分だ。息子のヨセフがまだ生きているとは。私は死ぬ前に彼に会いに行こう。」 ヤコブはヨセフはすでに死んだものと考え

えていました。その彼が生きていて今このような贈り物を送ってくれて、会いに来るよう招いているとは信じられないようなことです。神が摂理によって備えてくださる祝福は、このように私たちの思いを遥かに超えるものであることがこのヤコブの言葉にも表されています。

ローマ人への手紙 8 章 28 節：「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」 今日この章は御言葉と深い関係があると思います。ここに「すべてのことがともに働いて益となる」とあります。この「すべてのこと」の中には、もちろん誰かが私に対してした悪も含まれます。ですから誰かが自分に悪を行った時、私たちは次のように思うべきではないでしょうか。すなわち神はここから何か良いことをしようとしておられる。神は何か良いお考え、良いご計画を持っておられると。そのような目を持つことができたなら、私たちはまた違った感情を持って物事を見るようにされるのではないのでしょうか。これから先に楽しみなことがまた増えた！という思いさえ持つことが可能になります。あるいは誰かが行った悪ではなくても、何か心かき乱される状況が生じた時、悲しい出来事が起こった時も同じです。その時、悲しいと感じる気持ちを否定する必要はありませんが、同時に私たちは神がこのことを通して何か私を祝福しようとしておられると受け止めることができるのです。神の主権を信じるなら、そういうことになるのです。神はすべてのことを相働かせて益とさせていただきますのです。それが具体的にどのようにしてそうなるかはすぐには分からないかもしれません。ヨセフもこの神の御心が分かるまで 22 年かかりました。私たちの今経験していることが 22 年後になって、その意味が分かるようになるというこの時間の長さを考えてみてください。実際の時間は一人一人色々でしょうけれども、神の導きは人間の思いを遥かに超えるものであることが分かって来ます。またそのためには特に忍耐が必要とされるということを改めて覚えさせられます。

ある人はヨセフにはこのことが当てはまっても、私にもこれが当てはまるとどうやって確信できるだろうかと思うかもしれません。そんな私たちに対して、先ほどの御言葉の少し後のローマ書 8 章 32 節にこうあります。「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」 神は私たちのためにご自身にとって最も大切な一人子さえも惜しまずに与えてくださいました。としたら、

神はその他のご自身の持てるものすべてを惜しみなく私たちに与えてくださる方であるはずでず。その神は全能の力を持つお方として、絶対主権を持つお方として、私たちの最善の益に至るように、すべてのことを調整し、相働かせて導いてくださっています。たとえ私たちにとって残念に思うこと、つらく悲しく思われることが起こっても、それを通してより私たちに益へと導くためのプログラムを今日も推進してくださっています。この神の主権と摂理を信じて慰められ、どんな時も心を強くされ、神に希望を置き、神に信頼し、神に従う者たちでありたいと思います。またこの神の主権を信じて深く慰められている者たちとして、他の人々との関わりにおいても私たちの信仰を表す行動を取るようにと導かれ、そのことにおいても神の恵みを証しし、神の祝福を宣べ伝える神の民の歩みを導かれて行きたいと思います。